

トマス・アクィナス『定期討論集 靈的被造物について』

第一項 試訳

石田 隆太

1 はじめに

本稿は、トマス・アクィナス (c.1225-1274) の『定期討論集 靈的被造物について』 (*Quaestio disputata de spiritualibus creaturis*)¹ 第一項の試訳である。この第一項では、被造の靈的実体 (天使や人間の魂) の内に質料と形相による複合があるのかどうかということをめぐる、複合があるという二十五の主張が【異論】として示され、複合はないとする十四の【反対異論】が示された後に、トマス自身の見解が【主文】として述べられる。主文の後には、トマス自身の見解の下に、二十五の異論を批判的に検討する形で【異論解答】が述べられていく。こうした著述形式は、トマスの大著『神学大全』 (*Summa theologiae*) などと基本的に同じであるが、『神学大全』はこうした討論の形式を模して書かれたものであるのに対して、定期討論集は実際に行われた討論をまとめたものであるという点が異なっている。その意味では、『神学大全』などと比べて、定期討論集の方が討論の現場に近いものであり、『神学大全』では省略されてしまうような細かいこと²まで取り上げられているのが特徴である。

次に、本稿の意図を述べておきたい。本稿は『定期討論集 靈的被造物について』の全訳を目指す試みの一環である。それは、「天使博士」 (*Doctor Angelicus*) の異名を持つトマスの天使論において、あるいはそれと関連する形で人間の魂についてのトマスの思想を研究するにあたって、『定期討論集 靈的被造物について』

¹ 『定期討論集 靈的被造物について』の著作年代などに関しては、次のものを参照: Jean-Pierre Torrell, *Initiation à saint Thomas d'Aquin*, 3e édition (Paris: Éditions du Cerf, 2008), pp.235-36, p.490. Torrellによれば、『定期討論集 靈的被造物について』の基になった討論が行われたのは1267年から1268年の間であるとされる。この時期はトマスがイタリアに滞在していた時期にあたる。Cf. James A. Weisheipl, *Friar Thomas D'Aquino* (Washington, DC: The Catholic University of America Press, 1983), p.364. Weisheiplも1267年から1268年の間という立場である。

² 例えば、本項の第二十一異論及びその異論解答を参照。

て』が重要な著作であるとの考えに基づく。本稿で訳出した第一項に限って言えば、「質料」(materia)という言葉の使い方によっては、被造の霊的な実体の内に「質料」があると言える余地があることをトマスは述べている。ただしそれは、アヴィケブロン (c.1021-c.1057) やボナヴェントゥラ (c.1216-1274) が意味するような「霊的な質料」(materia spiritualis) のことではなく、「可能態」(potentia) を意味する場合のみである。トマス自身の立場は基本的に、被造の霊的な実体の内には「質料」はないというものであるが、自らとは対立する見解をこのように解消していることは、慎重に吟味する必要があるだろう。その詳細な検討は後稿を期すことにするが、本稿は訳出を優先させたものであるため、紙幅の都合もあり、註も必要最小限のものに留めていることを付言しておきたい。

最後に、本稿の訳文作成にあたっては、以下の方々の協力を得ることができた。この場を借りて感謝申し上げます (氏名は五十音順、敬称略)。

小山田圭一 (東京工業大学) 川合恵生 (東京女子大学) 菅原領二 (慶應義塾大学) 野邊晴陽 (慶應義塾大学) 和田史比呂 (慶應義塾大学)

2 凡例

- ・訳出にあたっては、以下のレオ版を底本とした。

Cos, Joseph ed. *Sancti Thomae de Aquino Opera Omnia iussu Leonis XIII P.M. edita Tomus XXIV-2, Quaestio disputata de spiritualibus creaturis*. Roma: Commissio Leonina, 2000.

- ・ただし、レオ版のテキストにはいくつか読解の困難な箇所もあるため、所によって次のものが提案する読みに従った。

Guldentops, Guy. & Carlos Steel. "Critical Study: the Leonine Edition of *Q. de spiritualibus creaturis*." *Recherches de Théologie et Philosophie Médiévales* 68, 1 (2001): 180-203.

- ・今回参照できた翻訳は以下の通りである。

<英訳>

FitzPatrick, Mary C. *On Spiritual Creatures*. Milwaukee: Marquette University Press, 1949.

Goodwin, Colin Robert. "A Translation of the *Quaestio disputata de spiritualibus creaturis* of St Thomas Aquinas, with Accompanying Notes." M.A. thesis, Australian Catholic University, 2002.

<仏訳>

Brenet, Jean-Baptiste. *Les créatures spirituelles*. Paris: J.Vrin, 2010.

<伊訳>

Savagnone, Giuseppe. *Le questioni disputate*, vol.4. Bologna: Edizioni Studio Domenicano, 2001.

- ・訳文中の [] は訳者による補いであり、() は原語の引用である。
- ・また、訳語の選定にあたってはこれまでのトマスの様々な日本語訳を参照したが、一例として次のものを挙げておく。

長倉久子・蒔苗暢夫・大森正樹『トマス・アキナス「神学大全」語彙集（羅和）』，新世社，1988年。

3 試訳

靈的被造物について

第一項³

問題となるのは、靈的被造物についてである。そして第一に問題となるのは、被造の靈的実体は質料と形相から複合されているのか否かである。

【異論】

そして、被造の靈的実体は質料と形相から複合されていると思われる。その理由は以下の通り。

一。ボエティウスが『三位一体論』第一章で述べていることには⁴、単純形相は基体たり得ない。しかるに、被造の靈的実体は知や徳や恩寵の基体である。故に、被造の靈的実体は単純形相ではない。しかしながらまた、被造の靈的実体は単純な質料でもない。何故なら、もし単純な質料であるならば、被造の靈的実体は、何らのはたらき (operatio) をも有さないで、単に可能態においてのみあることになるからである。故に、被造の靈的実体は質料と形相から複合されている。

二。さらには、被造の形相であれば何であれ、限定的 (limitatus) で有限 (finitus) である。しかるに、形相は質料を通じて限定される。故に、被造の形相であれば何であれ、質料の内にある形相である。故に、いかなる被造の実体も質料なしの形相ではない。

三。さらには、可変性の源 (principium mutabilitatis) は質料である。それ故に、

³ 平行箇所は以下の通り：『エンスと本質について』第 4-5 章、『「命題集」註解』第 1 巻第 8 区分第 5 問題第 2 項、同書第 2 巻第 3 区分第 1 問題第 1 項、同巻第 17 区分第 1 問題第 2 項、『ボエティウス「三位一体論」註解』第 5 問題第 4 項第 4 異論解答、『任意討論集 第九』第 4 問題第 1 項、『対異教徒大全』第 2 巻第 50-51 章、『定期討論集 能力について』第 6 問題第 6 項第 4 異論解答、『神学大全』第 1 部第 50 問題第 2 項、同書同部第 75 問題第 5 項、『定期討論集 魂について』第 6 項、『任意討論集 第三』第 8 問題第 1 項、『分離実体について』第 5-8 章。本討論集の中では、第 9 項第 9 異論解答。

⁴ Cf. ボエティウス『三位一体論』第 2 章。

哲学者アリストテレスによれば⁵、動かされた事物においては質料のことが想像されなければならない。しかるに、被造の靈的実体は可變的である。というのも、本性的に不可變的なのは神のみだからである。故に、被造の靈的実体は質料を有している。

四。さらには、アウグスティヌスが『告白』第十二巻で述べていることには⁶、可視的なものと不可視的なものに共通な質料を神は造った。ところで、靈的実体は不可視的である。故に、靈的実体は質料を有している。

五。さらには、哲学者アリストテレスが『形而上学』第八巻において述べていることには⁷、もし或る実体に質料がないならば、その実体は直ちにエンス (ens) でありかつ一なるものであり、その実体にとって、エンスでありかつ一なるものであることの原因は他にはない。しかるに、被造のものはすべて、自らのエッセ (esse)⁸と自らの一性の原因を有している。故に、いかなる被造のものも質料のない実体ではない。故に、被造の靈的実体はすべて質料と形相から複合されている。

六。さらには、アウグスティヌスが『旧約聖書及び新約聖書の問題について』において述べていることには⁹、アダムの身体は、魂がその身体に注入されるよりも前に形成された。何故なら、居住者が招き入れられるよりも前に住居が造られなければならないからである。魂が身体に対して関係付けられるのは、居住者が住居に対して関係付けられるのと同様である。しかるに、居住者はそれ自体で自存するものである。したがって、魂はそれ自体で自存するものであって、天使もなおさうである。だが、それ自体で自存する実体は単に形相であるのみではないと思われる。故に、被造の靈的実体は単に形相であるのみではない。故に、被造の靈的実体は質料と形相から複合されている。

⁵ Cf. アリストテレス『形而上学』第2巻 (994b26) .

⁶ Cf. アウグスティヌス『告白』第12巻第17章25節.

⁷ Cf. アリストテレス『形而上学』第8巻 (1045a36-b5) .

⁸ 「エッセ」とは、ラテン語の *esse* の音写である。この語には「～がある」という意味と「～である」という意味があるので、強いて訳すとすれば「ある」という訳語を採用すべきかもしれないが、「エッセ」ということがトマス思想において重要なキーワードであることを考慮し、本論では基本的に「エッセ」と音写することにする。同様の趣旨から、*esse* の派生語である *ens* も「エンス」と訳出した。

⁹ Cf. 偽アウグスティヌス『旧約及び新約聖書の問題について』第23問題.

七。さらには、明白なことに、魂は相対立するものを受容する。ところで、相対立するものを受容するということは複合実体に固有なことだと思われる。故に、魂は複合実体なのであり、同じ理由によって天使もまたそうである。

八。さらには、形相とはそれによって或るものであるところのもの (quo aliquid est) である。故に、それによってあるところのもの (quo est) とそれであるところのもの (quod est) から複合されたものは何であれ、質料と形相から複合されている。ところで、ポエティウスの『デ・ヘブドマディブス』において明らかなように、被造の靈的実体はすべて、それによってあるところのもの (quo est) とそれであるところのもの (quod est) から複合されている。故に、被造の靈的実体はすべて、質料と形相から複合されている。

九。さらには、共通性 (communitas) には二つある。一つは神的なものにおけるものであり、本質が三つのペルソナに共通な場合である。もう一つは被造の事物におけるものであり、普遍が自らよりも下位のものに共通な場合である。ところで、第一の共通性に個別なことは次のことだと思われる。すなわち、その共通なもの [=神の本質] に共通しているもの [=三つのペルソナ] がそれによって区別されるところのものは、その共通なものそのものと実在的に別ではない。というのも、それによって御父が御子から区別される場所の父性 (paternitas)¹⁰ とは、御父と御子に共通な本質そのものだからである。他方で、普遍の共通性 (communitas universalis) においては、共通なものに含まれているものがそれによって区別される場所のもの (id quo distinguntur ea quae continentur sub communi) は、その共通なものそのものとは別である。故に、或る共通の類に含まれている被造のものすべてにおいては、共通であるものと、それによって共通なものそのものが制限される場所のもの (id per quod commune ipsum restringitur) との複合がなければならない。ところで、被造の靈的実体は或る類においてある。故に、被造の靈的実体においては、共通な本性と、それによって共通な本性が狭められる場所のもの (id per quod natura communis coartatur) との複合がなければならない。ところで、これは形相と質料の複合のことだと思われる。故に、被造の靈的

¹⁰ レオ版では paternitas (...) quo Pater distinguitur a Filio となっているが、Guldentops & Steel に従って、quo を qua に読み替える。

実体においては、形相と質料の複合がある。

十。さらには、類の形相は知性ないし質料においてのみあり得る。しかるに、天使のような被造の靈的実体は、或る類の内にある。したがって、被造の靈的実体の類の形相は、知性においてのみあるか、あるいは質料においてのみある。しかるに、もし天使が質料を有さないならば、天使は質料においてはないうであろう。故に、天使は知性においてのみあることになるであろう。そして、天使を知性認識するものは誰もいないと仮定するならば、天使はいないということが帰結されるが、それは適切を欠いている。したがって、被造の靈的実体は質料と形相から複合されていると言わなければならないと思われる。

十一。さらには、もし被造の靈的実体が単に形相のみであるなら、或る一つの靈的実体は他の靈的実体に現前しているということが帰結されるだろう。というのも、もし或る一つの天使が他の天使を知性認識するなら、このことが知性認識された天使の本質によってなされる場合には、知性認識された天使の実体はその知性認識された天使を知性認識する天使の知性に現前していなければならないであろう。あるいは、このことが形象によってなされる場合には、もしそれによって天使が他の天使から知性認識される場所の形象が知性認識された天使の実体そのものとは異なるならば、その場合にも同じことが帰結される。また、もし天使の実体はその可知的形象と同様に質料のないものであるならば、天使の実体がどこにおいて異なっているのかを見分けることができないと思われる。ところで、或る一つの天使が自らの本質によって他の天使に現前しているということは適切を欠いている。何故なら、三位一体のみが理性的な精神に流れ込むからである。故に、以上のことがそれから帰結される場所の第一のこと、すなわち被造の靈的実体は非質料的であるということもまた適切を欠いている。

十二。さらには、註釈家アヴェロエスが『形而上学』第十一巻において〔註釈しながら〕述べていることには¹¹、もし箱に質料がないならば、その箱は知性内にある箱と同じものになるであろう。かくして前述のことと同じことになると思われる。

¹¹ Cf. アヴェロエス『「形而上学」註解』第12巻第36註釈。

十三。さらには、アウグスティヌスが『「創世記」逐語註解』第七巻で述べていることには¹²、肉が、質料すなわちそこから肉が生じたところの地を有したのと同様に、魂と呼ばれているその本性そのものが生じる前に、自らの類に応じた、まだ魂ではないところの或る靈的な質料を有することがおそらくできた。故に、魂は質料と形相から複合されていると思われる。そして同じ理由によって天使もまたそうであると思われる。

十四。さらには、ダマスケヌスが述べていることには¹³、「ただ神のみが本質的な仕方では非質料的であり非物体的である」。故に、被造の靈的実体はそうではない。

十五。さらには、自らの本性の限定によって境域限定されたすべての実体 (*omnis substantia naturae suae limitibus circumscripta*) は、限定的で狭められたエッセ (*esse limitatum et coartatum*) を有している。しかるに、すべての被造の実体は自らの本性の限定によって境域限定されている。故に、すべての被造の実体は、限定的で狭められたエッセを有している。しかるに、狭められているものはすべて或るものによって狭められている。故に、被造の実体の内にはいかなるものであれ狭める或るものと狭められた或るものがある。そしてこれは形相と質料のことだと思われる。故に、すべての靈的実体は質料と形相から複合されている。

十六。さらには、同じものに即して能動し受動するものは何もなく、むしろ各々のものは、形相によって能動する一方、質料によって受動する。しかるに、天使のような被造の靈的実体は、より下位の天使を照明しながら能動し、より上位の天使からは照明されながら受動する。同様に、魂においても能動知性と可能知性がある。故に、天使も魂も質料と形相から複合されている。

十七。さらには、あるところのものはすべて (*omne quod est*)、純粹現実態であるか、純粹可能態であるか、現実態と可能態から複合されている。しかるに、靈的実体は純粹現実態ではない。というのも、このことはただ神にのみ属するからである。また、靈的実体は純粹可能態でもない。故に、可能態と現実態から複合されるということは、質料と形相から複合されることと同じことだと思われる。

¹² Cf. アウグスティヌス『「創世記」逐語註解』第7巻第6章9節。

¹³ Cf. ダマスケヌス『正統信仰論』第2巻第3章。

十八。さらには、プラトンは『ティマイオス』において¹⁴、被造の神々について語り、「私の意志はあなたたちの絆 (nexus) よりも大きい」と述べながら、最高神を引き合いに出している。そしてこの言葉をアウグスティヌスが『神国論』において¹⁵引き合いに出している。ところで、被造の神々とは天使のことだと思われる。故に天使の内には、絆ないし複合がある。

十九。さらには、数えられるものであり本質的な仕方で異なるものの内には質料がある。何故なら、質料は数による区別の源だからである。しかるに、靈的実体は数えられるものであり本質的な仕方で異なるものである。故に、靈的実体は質料を有している。

二十。さらには、質料を有するもののみが身体を受ける。しかるに、アウグスティヌスの『神国論』によって明らかなように¹⁶、被造の靈的実体は物的な火を受ける。故に、被造の靈的実体は質料を有している。

二十一。さらには、ボエティウスが『一性と一について』においてはっきりと述べていることには¹⁷、天使は質料と形相から複合されている。

二十二。さらには、ボエティウスが『デ・ヘブドマディブス』において述べていることには、あるところのもの (id quod est) は混在している他の或るもの (aliquid aliud ammixtum) を有することができる。しかるに、エッセそのものは混在している他のものを全く何らも有さない。そして同じことを、すべての抽象的なものと具体的なものについても我々は言うことができる。何故なら、白さやこのような類の或るものと同様に、人間においては人間性以外の或るものがあることができる。だが、人間性そのものにおいては、ただ人間性の理 (ratio) に属する或るもののみがあることができる。故に、もし靈的実体が抽象的な形相であるなら、その靈的実体においては、自らの形象 [=種的形相] に属さない或るものがあることはできない。だが、事物の形象 [=種的形相] に属するものが取り除かれたら、

¹⁴ Cf. プラトン『ティマイオス』(41b) .

¹⁵ Cf. アウグスティヌス『神国論』第13巻第16章1節; 同書第22巻第26章.

¹⁶ Cf. 同書第21巻第10章1節.

¹⁷ Cf. ドミニクス・グンディサリヌス『一性と一について』.

事物は消滅する。故に、すべての靈的実体は不可滅的であるのだから、被造の靈的実体に内在しているものは何も失われ得ないだろう。そしてその結果として、被造の靈的実体は全く不可動的 (immobilis) であることになるだろうが、それは適切を欠いている。

二十三。さらには、類においてあるものはすべて、類の源を分有している。ところで、被造の靈的実体は実体の範疇においてあるが、ポエティウスの『「範疇論」註解』によれば¹⁸、この実体の範疇の源は質料と形相であると思われる。ポエティウスが述べていることには、範疇であるところの実体——『範疇論』ではその実体についてアリストテレスは考察している——が質料と形相から複合されていることを知性認識させながら、質料と形相という極端を排した上で、複合体という中間のものについてアリストテレスは考察している。故に、被造の靈的実体は質料と形相から複合されている。

二十四。さらには、類においてあるものはすべて、類と種差から複合される。ところで、『形而上学』第8巻において明らかのように¹⁹、種差は形相から取られる一方、類は質料から取られる。したがって、靈的実体は類においてあるのだから、靈的実体は質料と形相から複合されていると思われる。

二十五。さらには、何であれ類において第一のものであるところのものは、第一の現実態が現実態におけるあらゆるエンスの原因であるのと同様に、[類において第一のもの] 後のものの原因である。故に、同じ理由によって、いかなる仕方であれ可能態においてあるところのものはすべて、このこと [=類において第一のもの] はすべて、その後のものの原因であること] を、純粹可能態であるところの第一の可能態、すなわち第一質料から受けている。しかるに、或る可能態が被造の靈的実体においてある。何故なら、神のみが純粹現実態だからである。故に、被造の靈的実体は、質料がその実体の部分でない限りはあることができないということを、質料から受けている。故に、被造の靈的実体は質料と形相から複合されている。

¹⁸ Cf. ポエティウス『「範疇論」註解』第1巻「実体」についての章。

¹⁹ Cf. アリストテレス『形而上学』第8巻 (1043a19-21) .

【反対異論】

反対に、

一。ディオニュシウスが『神名論』第四章で天使について述べていることには²⁰、天使は「非物体的で非質料的」である。

二。しかし、天使が非質料的なものであると言われるのは、量と変移（*transmutatio*）の基体となる質料を有さない故であると〔第一反対異論に反対する者は〕述べていた。反対に、ディオニュシウス自身が前もって述べていることには²¹、被造の霊的実体は「あらゆる質料から浄化されている」。

三。さらには、哲学者アリストテレスの『自然学』第四巻によれば²²、場所は運動によってのみ探求される。そして同様に、質料も運動によってのみ探求される。故に、或るものが運動を有するということによって、その或るものにおいては質料が探求されるべきなのである。それ故に、生成消滅し得るものはエッセに対する質料を有している一方で、場所に従って変移し得るものは場所に対する質料を有している。だが、霊的実体はエッセに従って変移することができない。故に、霊的実体の内にはエッセに対する質料はあらず、かくして霊的実体は質料と形相から複合されていない。

四。さらには、サン＝ヴィクトルのフーゴーが、『ディオニュシウス「天使位階論」²³註解』で述べていることには²⁴、霊的実体においては、生を与えるもの（*quod vivificat*）と生を与えられるもの（*quod vivificatur*）とが同じである。しかるに、生を与えるものとは形相であるが、他方で、生を与えられるものとは質料である。というのも、形相は質料にエッセを与えるが、他方で、エッセとは生きるものにとっては生きることだからである。故に天使においては、質料と形相は異なるものではない。

²⁰ Cf. 偽ディオニュシウス『神名論』第4章第1節。

²¹ Cf. 同書同箇所。

²² Cf. アリストテレス『自然学』第4巻（211a12-13）。

²³ 『天上位階論』のこと。

²⁴ Cf. サン＝ヴィクトルのフーゴー『「天上位階論」註解』第5巻。

五。さらには、アヴィセンナ²⁵とアルガゼル²⁶が述べていることには、靈的実体と呼ばれる分離実体は、質料を全く纏っていない (denudatus)。

六。さらには、哲学者アリストテレスが『靈魂論』第三巻において述べていることには²⁷、「魂の内にあるのは石ではなく、むしろ石の形象である」。このこと、すなわち魂の内に質料的なものがあることはできないということは、魂の単純性の故であると思われる。故に、魂は質料と形相から複合されていない。

七。さらには、『原因論』において述べられていることには²⁸、「知性体とは分割されない実体である」。しかるに、複合されているものはすべて分割される。故に、知性体は複合実体ではない。

八。さらには、「質料を欠いているものにおいては、知性認識するものと知性認識されるものは同じである」²⁹。しかるに、知性認識されるものとは、全面的に非質料的な可知的形相のことである。故に、知性認識する実体も質料を欠いている。

九。さらには、アウグスティヌスが『三位一体論』において述べていることには³⁰、魂全体が自らを知性認識する。ところで、魂は質料によっては知性認識しない。故に、質料は魂の内の或るものではない。

十。さらには、ダマスケヌスが述べていることには³¹、魂は単純である。故に、魂は質料と形相から複合されていない。

十一。さらには、理性的靈 (spiritus rationalis) は非理性的靈 (spiritus brutalis) と比べて、第一の最も単純なもの、すなわち神により接近している。しかるに、非理性的靈は質料と形相から複合されていない。故に、理性的靈もなおさう

²⁵ Cf. アヴィセンナ『第一哲学 (ないし神学的) についての書』第9論考第4章。

²⁶ Cf. アルガゼル『形而上学』第1部第4論考第3区分。

²⁷ Cf. アリストテレス『靈魂論』第3巻 (431b29)。

²⁸ Cf. 『原因論』第6命題。

²⁹ Cf. アリストテレス『靈魂論』第3巻 (430a3-4)。

³⁰ Cf. アウグスティヌス『三位一体論』第10巻第4章。

³¹ Cf. ダマスケヌス『正統信仰論』第2巻第12章。

である。

十二。さらには、天使的実体は質料的形相と比べて、第一の単純なものにより接近している。しかるに、質料的形相は質料と形相から複合されていない。故に、天使的実体もまた同様である。

十三。さらには、附帯形相は、尊さの秩序（ordo dignitatis）という点で実体よりも劣っている。しかるに、聖餐の秘蹟（sacramentum altaris）において明らかのように、或る附帯形相が質料なしに自存することを神はなさしめる。故に、実体の類における或る形相が質料なしに自存することを神はなおさるなさしめるのであって、このことは靈的実体に最もよく当てはまると思われる。

十四。さらには、アウグスティヌスが『告白』第十二巻で述べていることには³²、「主よ、あなたは二つのものを造ったのであって、一方はあなたに近いもの、すなわち天使的実体を、他方は無に近いもの、すなわち質料を造った」。故に、かくして質料は天使の内にはない。というのも、質料は天使とは対立するものとして分けられているからである。

【主文】

解答。次のように言わなければならない。この問題をめぐっては或る人々が相反する仕方で主張を行っている。すなわち、被造の靈的実体は質料と形相から複合されていると主張する人々がいる一方で、このことを否定する人々がいる。それ故に、この真理を追究するにあたって我々が曖昧な仕方で進むことがないように、質料という名称によって何が表示されているのかを考察しなければならない。実際、明白なことには、可能態と現実態とはエンスを分けるものであり、そして、何であれ類は現実態と可能態によって分けられるのであるから、第一質料と一般に名付けられるものとは、実体の類において、あらゆる種と形相、及び欠如を除外して知性認識されるが、他方で、形相も欠如も受容する何らかの可能態としてある。そのことは、アウグスティヌスの『告白』第十二巻³³と『創世記逐語註解』

³² Cf. アウグスティヌス『告白』第12巻第7章7節。

³³ Cf. 同書同巻第8章8節。

第一卷³⁴及び哲学者アリストテレスの『形而上学』第七卷³⁵において明らかな通りである。

ところで、このようにして質料が解されるのであるならば——それが質料について本来の一般的な解し方 (*acceptio propria et communis*) である——、霊的実体の内に質料があることは不可能である。実際、ある時には現実態においてあり、ある時には可能態においてあるところの或る同一のものにおいては、可能態は現実態と比べて、時間という点ではより先なる仕方であるけれども、他方で、現実態は可能態と比べて、本性的にはより先なるものである。ところで、より先なるものはより後なるものには依存しないが、逆は真である [=より後なるものはより先なるものに依存する]。そしてそれ故に、あらゆる可能態を欠いた或る第一の現実態が見出される。他方で、或る現実態によって完全なものになることがない可能態は、実在界 (*rerum natura*) においては決して見出されない。そしてこのことの故に、第一質料においては常に或る形相がある。ところで、完全性のあらゆる充足 (*omnis plenitudo perfectionis*) を自らの内に有しているところの、端的に完全な第一の現実態からは、あらゆるものにおける現実的なエッセが原因されるが、他方でそれは何らかの秩序に即してである。というのも、いかなる原因された現実態も完全性のあらゆる充足を有しているわけではなく、むしろ、第一の現実態から見ると、あらゆる原因された現実態は不完全であるが、或る現実態は、それがより完全であればあるほど、それだけ神により接近するものとなるからである。ところで、ディオニュシウスの『天上位階論』第四章によって明らかなように、あらゆる被造物の間で霊的実体が最大限に神に接近している³⁶。それ故に、霊的実体が第一の現実態の完全性に最大限に近づいているのである。というのも霊的実体は、完全なものが不完全なものに対するように、そして現実態が可能態に対するようにして、より下位の被造物に関係付けられているからである。故に、あらゆるエンスの中で最も完成されていない第一質料を自らのエッセのために霊的実体が必要とするということを、事物の秩序の理 (*ratio ordinis rerum*) はいかなる仕方によっても有さない。むしろ霊的実体は、あらゆる質料とあらゆる質料的なものを遥かに超えて高められている。

このこと [=あらゆるエンスの中で最も完成されていない第一質料を自らのエッセのために霊的実体が必要とすること] はまた、霊的実体の固有のはたらきを

³⁴ Cf. 同『「創世記」逐語註解』第1巻第14章28節。

³⁵ Cf. アリストテレス『形而上学』第7巻 (1029a20-26) .

³⁶ Cf. 偽ディオニュシオス『天上位階論』第4章第2節。

考察する場合にも明白な仕方で窺える。実際、あらゆる靈的実体は知性的である。ところで、各々の事物の可能態とは、事物の完全性がもたらされるところのものである。何故なら、固有の現実態は固有の可能態を必要とするからである。ところで、何であれ知性的である限りの知性的な実体の完全性は、知性の内にあることに応じて、可知的である。したがって、靈的実体においては、可知的形相の受容に均齊のとれたものであるような可能態を必要としなければならない。ところで、第一質料の可能態はこのようなものではない。何故なら第一質料は、形相を個的なエッセへと収斂した上で形相を受容するからである。反対に、可知的形相は、このような収斂を欠いたままで知性の内にある。実際、かくして知性が各々の可知的なものを知性認識するのは、その各々の可知的なものの形相が知性の内にあることに即してである。ところで、知性が可知的なものを知性認識するのは、特に共通で普遍的な本性に即してである。そして、かくして知性の内にある可知的形相はその形相の共通性の理 (ratio) に即している。故に知性的実体は、第一質料の理 (ratio) によってではなく、むしろ相反する何らかの理 (ratio) [=個的なエッセへと収斂しないという理] によって、形相を受容する。それ故に靈的実体においては、それ自体であらゆる形象を欠いている第一質料がその靈的実体の³⁷部分であることはできない。

他方で、可能態と現実態として互いに関係している二つのものであれば何であれ、質料と形相であると名付けられるならば、その語 [=質料と形相という名称] における本義は成り立たないが (ut non fiat vis in verbis)、靈的実体の内には質料と形相があると述べることには何らの妨げもない。というのも、被造の靈的実体の内には、可能態が現実態に対するようにして、その一方が他方に対して関係付けられる二つのものがなければならないからである。そのことは次のようにして明らかである。実際、明白なことには、神であるところの第一の有は無限な現実態である。というのも神は、類や種の或る本性へと収斂されていないエッセの全き充足 (tota essendi plenitudo) を自らの内に有しているからである。それ故に、神のエッセそのものは、自らのエッセではない或る本性に与えられるようなエッセではない。何故なら、もしそうであるなら、神のエッセそのものはその或る本性に対して有限なものとされていることになるからである。それ故に、神は自らのエッセそのものであると我々は言うのである。ところで、このことは他のいずれのものについても言われ得ない。というのも、多数の分離された白さがあるこ

³⁷ レオ版では eius となっているが, Guldentops & Steel に従って, eius を earum に読み替える。

とを知性認識することは不可能である——むしろ、もしあらゆる基体および受容者から分離された白さがあるならば、その白さはただ一つしかないであろう——のと同様に、自存するエッセそのものが、ただ一つでない限りでそれがあるということは不可能である。したがって、第一のエンスの後にあるものはすべて、自らのエッセではないのだから、或るものにおいて受容されたエッセを有しており、その〔受容された〕エッセを通じてエッセそのものが収斂される。そしてかくして、何であれ被造のものにおいては、エッセを分有する事物の本性と分有されたエッセそのものとは別である。そして、何であれ事物は、エッセを有するものである限りにおいて、類同化 (*assimilatio*) によって純粹現実態を分有しているのだから、各々のものにおける分有されたエッセは、現実態が可能態に対するようにして、そのエッセを分有する本性に対して関係付けられなければならない。したがって、物的事物の本性において質料は、自らによってではなく、むしろ形相によって、エッセそのものを分有する。というのも、例えば身体に到来する魂のように、質料に到来する形相は、質料を現実的なエッセたらしめるからである。それ故に、複合された事物においては、二つの現実態と二つの可能態を考察することができる。すなわちまず始めに、質料は形相から見ると可能態としてあり、形相は質料の現実態である。そして次に、質料と形相から構成された本性は、自らのエッセを受容するものである限りにおいて、自らのエッセから見ると可能態としてある。したがって、質料という基礎 (*fundamentum*) から離れるとしても、もし決定された (*determinatus*) 本性のそれ自体で自存する或る形相が、質料の内にあることなくあり続けるならば、その場合にその形相は、可能態が現実態に対するようにして、自らのエッセに対して関係付けられるであろう。ところで、私が言っているのは、「現実態から分離され得る可能態」のことではなく、むしろ、常に自らの現実態が随伴する可能態のことである。そしてこのような仕方では、質料と形相から複合されてはいない靈的実体の本性は、自らのエッセから見ると可能態としてある。そしてかくして、あらゆる可能態が質料と呼ばれ、あらゆる現実態が形相と呼ばれるならば、靈的実体においては、可能態と現実態の、したがって形相と質料の複合がある。しかしながら他方で、このことは名称の一般的な使用 (*communis usus nominum*) に即して固有の仕方と言われることではない。

【異論解答】

故に、

一。第一については次のように言わなければならない。形相の理（ratio）は基体の理（ratio）とは対立している。すなわち、形相である限りでのすべての形相は現実態であるが、他方で、すべての基体は、可能態が現実態に対するようにして、それがその基体であるところのものに対して関係付けられている。故にもし、神の本質のように、単に現実態であるのみの何らかの形相があるならば、その形相はいかなる仕方によっても基体となることはできない。そしてこうした形相についてポエティウスは語っている。他方で、もし或る形相が、或るものに即しては現実態においてあり或るものに即しては可能態においてあるならば、それに即してはその形相が可能態においてあるところのものに即してのみ、その形相は基体であることになるだろう。ところで靈的実体は、自存する形相ではあるけれども、他方で、有限で限定的なエッセを有している限りにおいては可能態においてある。そして、知性は知性の理（ratio）に即してあらゆるものを認識し、意志は普遍的な善を欲求するのであるから、被造的実体の知性と意志においては、自らの外にある或るものに対する可能態が常にあり続ける。それ故に、もし正確に考察するならば、靈的実体は知性と意志に属する附帯性の基体としてのみ見出される。

二。第二については次のように言わなければならない。形相の限定（limitatio）には二つある。すなわち、一つは種の形相が個に対して限定される場合のものであり、形相のそのような限定は質料による。他方でもう一つは、類の形相が種の本性に対して限定される場合のものであり、形相のそのような限定は、質料ではなく、むしろそこから種差が取られる限定的な形相による。実際、類に対して付加された種差は、類を種へと収斂する。そしてそのような限定が靈的実体においてあるのは、靈的実体が決定された（determinatus）種の形相である場合である。

三。第三については次のように言わなければならない。可変性が靈的実体において見出されるのは、靈的実体のエッセに即してではなく、むしろ〔靈的実体の〕知性と意志に即してである。しかるに、そのような可変性は、質料によってではなく、むしろ〔靈的実体の〕知性と意志の可能態性によって生じる。

四。第四については次のように言わなければならない。アウグスティヌスの意図は、可視的なものと不可視的なものの質料が数において同じであることを主張することではない。というのもアウグスティヌスは、まず始めに創造されたものである天と地ということで、二つの無形相性を主張しているからである。すなわち、天ということでは依然として無形相な靈的実体のことが知性認識される一方で、地ということでは物的事物の質料のことが知性認識される。それ [=地] は、それ自体で考察された場合には、あたかもあらゆる種を欠いているようなものである。それ故にまた、他の著作によれば、地は「虚ろで空っぽのもの」ないし「不可視的で複合されていないもの」と言われているが、天は虚ろで空っぽのものとして述べられてはいない³⁸。それ故に明白に窺えることには、あらゆる種を欠いている質料は天使的実体の部分ではない。むしろ、靈的実体の無形相性があるのは、それから照明が行われて可知的な能力に関わる御言葉 (Verbum) へと、靈的実体がまだ向け変えられていない場合である。故に、かくしてアウグスティヌスが、可視的なものと不可視的なものに共通な質料を、両者 [=可視的なものと不可視的なもの、すなわち物的事物と靈的実体] の各々に対して名付けているのは、その各々のものが自らのあり方において無形相であることに応じてなのである。

五。第五については次のように言わなければならない。哲学者アリストテレスがそこで語っているのは、能動因についてではなく、むしろ形相因についてである。実際、質料と形相から複合されているものは、直ちにエンスでありかつ一なるものではない。むしろ質料は、可能態におけるエンスであり、質料にとってエッセの原因 (causa essendi) である形相の到来によって、現実的なエンスとなる。しかるに、形相は他の形相によってはエッセを有さない。それ故に、もし或る自存する形相があるならば、その形相は直ちにエンスでありかつ一なるものではあっても、自らのエッセの形相因を有してはいない。他方でその形相は、自らにエッセを流入させる原因を有してはいるが、先在している可能態から現実態へと自らを還帰させる運動因を有してはいない。

六。第六については次のように言わなければならない。魂はそれ自体で自存するものであるけれども、他方で、[魂がそれ自体で自存するものであるということ

³⁸ Cf. アウグスティヌス『「創世記」逐語註解』第1巻第1章2節及び3節。

から]魂は質料と形相から複合されているということは帰結されない。何故なら、それ自体で自存することは質料を欠いている形相にも適合し得るからである。というのも、質料は形相によってエッセを有するがその逆は成り立たないのであるから、質料が形相なしにあることはできないが、或る形相が質料なしに自存することを妨げるものは何もないからである。

七。第七については次のように言わなければならない。相対立するものを受容するエッセは、その実体が質料と形相から複合されているにせよ、単純なものであるにせよ、可能態において或る仕方で存在する実体に属する。ところで、上述のことから明らかなように³⁹、靈的実体が相対立するものの基体であるのは、その相対立するものが意志と知性に属する場合のみであり、その意志と知性に即しては、靈的実体は可能態においてある。

八。第八については次のように言わなければならない。それであるところのもの (quod est) とそれによってあるところのもの (quo est) から複合されることと、質料と形相から複合されることは同じではない。というのも、形相はそれによって或るものがあるところのもの (quo aliquid est) であると言われ得るが、他方で質料は、それであるところのもの (quod est) だと固有の仕方では言われ得ないからである。何故なら、質料は可能態においてのみあるからである。しかるに、それであるところのもの (quod est) とは、エッセにおいて自存するところのもの (id quod subsistit in esse) である。それは、確かに物的実体においては質料と形相からの複合そのものである一方で、非物的実体においては単純な形相そのものである。ところで、それによってあるところのもの (quo est) とは、分有されたエッセそのもの (ipsum esse participatum) のことである。何故なら、各々のものがあるのは、自らにエッセを分有する限りにおいてだからである。それ故にボエティウスもまた、第一のもの [=神] 以外のものにおいてはそれであるところのもの (quod est) とエッセは同じではないと述べた上で、その言葉 [=quo est と quod est] を『デ・ヘブドマディブス』において使っている。

九。第九については次のように言わなければならない。或るものが或る共通なものの下にあるのには二つの仕方がある。一つは個が種の下にあるような仕方

³⁹ Cf. 本項第一異論解答.

あり、もう一つは種が類の下にあるような仕方である。したがって、或る一つの共通な種の下に多数の個がある場合にはいつでも、多数の個の区別は、種の本性には属さない個的な質料 (*materia individualis*) による。そして、こうしたことは被造の事物においてのことである。他方で、或る一つの類の下に多数の種がある場合には、それによって種が互いに区別されるところの形相は、類の共通な形相とは事物に即して別でなければならない。実際こうした個 [=種的な個] は、或る同一の形相 (*una et eadem forma*) を通じて実体の類と物体の類に配置され、かくして最も特殊な種にまで至る。というのも、もしこうした個が或る形相に即して実体であることを有するならば、それに即してこうした個がより下位の類や種に配置されるところのさらに付加的な他の形相は附帯形相でなければならないということになってしまうのが必然だからである。そのことは次のことから明らかである。実際、附帯形相は実体形相とは異なっている。何故なら、実体形相はこの或るもの (*hoc aliquid*) をなす一方で、附帯形相は既にこの或るものとして存在する事物に到来するからである。したがって、もしそれを通じてこの或るものが類に配置されるところの第一の形相がこの或るものを個たらしめるのであるならば、他のあらゆる形相はすべて、現実態において自存している個に到来するのであり、その結果としてそれは附帯形相であることになるだろう。また、次のことも帰結されるだろう。すなわち、それによって或るものが下位の最も特殊な種に配置されるところのより後なる形相の到来を通じては、生成ということはなく、また [形相の] 欠失 (*subtractio*) を通じては、端的には消滅もないが、或る意味では消滅はある。というのも、生成とは事物のエッセへの変移 (*transmutatio*) であるのだから、生成されると端的に言われるのは、現実態におけるエンスからではなくむしろ可能態においてのみあるエンスから、端的にエンスとして生じるものだからである。したがって、もし或るものが現実態において先在するものから生じるならば、それは端的にエンスとして生成されるのではなく、むしろこのエンス (*hoc ens*) として生成されるであろう。そして同じ理 (*ratio*) が消滅についても成り立つ。故に、事物の形相は秩序付けられており、或る一つの形相は完全性において他の形相に [何かを] 付け加えるのだと言わなければならない。このことは、哲学者アリストテレスが『形而上学』第八巻において⁴⁰、事物の定義と種は、それにおいて種が一性の付加によって多数化されるところの数のようであると述べていることから明らかであり、また、事物の種が完全なものとは不完全な

⁴⁰ Cf. アリストテレス『形而上学』第8巻 (1043b33-1044a2) .

ものに即して段階的に多数化されることが帰納 (inductio) によって窺えることから明らかである。したがって、かくして以上のことによって、『生命の泉』におけるアヴィケブロン⁴¹の立場は排除される。その立場によれば、全く質料のないものとして考察される第一質料は、まず始めに実体形相を受容し、その実体形相が自ら [=第一質料] の或る部分に前提されることで、実体形相に加えて、それによって物体となるところの他の形相を受容し、そして次に、かくして最終的な種にまで至る。そして、それにおいて第一質料が物的形相を受容しないところの部分には、非物的実体がある。その非物的実体が有する量の基体とはならない質料を或る人々は霊的質料 (materia spiritualis) と名付けている。ところで、量や他の附帯性の基体である実体の形相によって既に完全なものとなっている質料そのものが、非物的実体を知性認識する鍵 (clavis) であるとアヴィケブロンは述べている⁴²。[だが、] 実際、或る個は生を与えられていない物体 (corpus inanimatum) であり、他の個は生を与えられている物体 (corpus animatum) であるということが生じるのは、それに対して物体の実体形相が委ねられるところの或る形相を、生を与えられている物体が有しているからなのではなく、むしろ、それによって自存し物体であることのみならず生きていることをも有するところのより完全な形相を、生を与えられている個は有している一方で、他のもの [=生を与えられていない個] は、それによって生までは到達せず物的に自存することのみに到達するところのより不完全な形相を有しているからなのである。

十。第十については次のように言わなければならない。その理 (ratio) に質料が属するところの類の形相は、例えば植物ないし鉱物の形相のように、質料においてのみ知性の外にあることができる。しかるに、「実体」というこの類は、その理 (ratio) に質料が属するものではない。さもないと、実体というこの類は形而上学的なものではなくむしろ自然学的なものになってしまう。それ故に、こうした類の形相は、自らのエッセに即しては質料に依存しているのではなく、むしろ質料の外においてもまた見出され得る。

十一。第十一については次のように言わなければならない。知性認識する天使の知性の内にある可知的形象は、知性認識された天使とは異なっている。それは、

⁴¹ Cf. アヴィケブロン『生命の泉』第4論考3節。

⁴² Cf. 同書第2論考6節。

質料から抽象されたものと質料の具体化されたものに即して異なっているのではなく、むしろ、目における色の形象が壁の内にある色とは異なっているように、志向的なエンス (*ens intentionale*) が本性において確立されたエッセ (*esse ratum in natura*) を有しているエンスとは異なっているのと同様である。

十二。第十二については次のように言わなければならない。もし箱が質料なしにそれ自体で自存するものであるなら、その箱は自らそのものを知性認識するものであろう。何故なら、質料からの免除 (*immunitas a materia*) が知性性の理 (*ratio intellectualitatis*) だからである。そしてこのことによれば、質料のない箱は可知的な箱とは異ならないであろう。

十三。第十三については次のように言わなければならない。アウグスティヌスがそのこと [=異論で述べられていること] を引き合いに出しているのは探究の途上においてである。そのことは、彼がその立場を否認していることから明らか通りである。

十四。第十四については次のように言わなければならない。ただ神のみが非質料的であり非物体的であると言われるのは、神の単純性に対して関係付けられたすべてのものは、それ自体では非物体的であり非質料的であるとしても、あたかも質料的な物体として考察され得るからである。

十五。第十五については次のように言わなければならない。霊的被造物の実体のエッセは、質料によってではなく、むしろ、上で述べられたように⁴³、決定された種の本性において受容され分有されたということによって、狭められて限定される。

十六。第十六については次のように言わなければならない。被造の霊的実体が能動し受動するのは、形相ないし質料に即してではなく、むしろ現実態ないし可能態においてあることに即してである。

十七。第十七については次のように言わなければならない。霊的実体は純粹現

⁴³ Cf. 本項第2 異論解答.

実態でもなく純粹可能態でもない。むしろ、上述のことから明らかなように⁴⁴、靈的実体は現実態と共に可能態を有するが、質料と形相から複合されてはいない。

十八。第十八については次のように言わなければならない。プラトンが第二の神々と呼んでいるのは、天使のことではなくむしろ天体のことである。

十九。第十九については次のように言わなければならない。質料は、同じ種における数による区別の源であって、種の区別の源ではない。ところで天使は、同じ種の中で数において多数ではない。むしろ天使の多数性は、種のそれ自体で自存する多数の本性的なものとしてある。

二十。第二十については次のように言わなければならない。アウグスティヌスが述べているように、靈的実体が物的な火を受けるのは、質料的な変質 (*alteratio materialis*) という仕方によってではなく、むしろ繫縛 (*alligatio*) という仕方によってである。それ故に、靈的実体が質料を有しているわけではない。

二十一。第二十一については次のように言わなければならない。文体そのものが示しているように、『一性と一について』という書物はボエティウスのものではない。

二十二。第二十二については次のように言わなければならない。現実態である限りでの分離された形相ではなく、むしろ可能態においてある限りでの分離された形相のみが、外にある混在した或るものを有することができる。そしてこのような仕方、知性と意志に即しては可能態においてある限りでの靈的実体は、或る附帯性を受容している。

二十三。第二十三については次のように言わなければならない。ボエティウスの意図は、類である限りでの実体⁴⁵の理 (*ratio*) には、質料と形相から複合されていることが属するということ述べることではない。というのも、実体は形而上学者の考察に属するのであって、自然学者の考察に属するのではないからである。

⁴⁴ Cf. 本項主文最終段落。

⁴⁵ レオ版では *substantie, quod est genus (...)* となっているが、仏訳者の Brenet に従って、*quod* を *secundum quod* と読み替える。

むしろ、ポエティウスが述べようと意図していることには、形相と質料はいわば種としての実体の類には属さないのだから、複合体であるところの実体のみが、種としての類において集められる。

二十四。第二十四については次のように言わなければならない。質料と形相から複合された事物においては、類は質料から取られ、種差は形相から取られる。ただしそれは、質料によって第一質料が知性認識されないという仕方によってであって、むしろ質料は、種的なエッセから見ると、不完全で質料的な何らかのエッセを形相によって受容する。例えば、動物のエッセは人間のエッセから見ると不完全で質料的である。他方でそうした二つのエッセは、別々の形相ではなく、むしろ或る一つの形相に即したものである。その或る一つの形相は、動物であるということだけでなく、人間であるということをも人間に与える。ところで、[人間以外の] 他の動物の魂は、動物であるということのみを人間と通じている⁴⁶。それ故に、共通の動物というのは、数によって一なるものではなく、むしろ[動物の] 理 (ratio) によってのみ一なるものである。何故なら、或る同一の形相 (*una et eadem forma*) によって人間も驢馬も動物であるのではないからである。故に、靈の実体から質料が欠失しても、その靈の実体には類と種差があり続けるだろう。それは、質料と形相に即してではなく、むしろ、靈の実体において、自らにとって固有であるものと同様に、自らにとっても、より不完全な実体にとっても共通であるものが考察されるということに即してなのである。

二十五。第二十五については次のように言わなければならない。或るものがより現実態においてあればあるほど、それだけその或るものはより完全なものとなる一方で、或るものがより可能態においてあればあるほど、それだけその或るものはより不完全なものとなる。ところで、不完全なものは完全なものからその起源を得るが、その逆は成り立たない。それ故に、いかなる仕方によっても可能態においてあるものはすべて、質料であるところの純粹可能態からこのこと [=類において第一のものはすべて、その後のものの原因であること] を有しているわけではない。そしてこの点においてアヴィケブロンは、『生命の泉』において誤っていたと思われる⁴⁷。すなわち彼は、可能態においてあるものないし基体はすべて、

⁴⁶ 原文では *dat* となっている所を、文脈を考慮して「与える」とは訳さなかった。

⁴⁷ Cf. アヴィケブロン『生命の泉』第1論考15節。

このこと [=類において第一のものはすべて、その後のものの原因であること]
を第一質料から有すると信じたのである。

（いしだ・りゅうた 筑波大学人文社会科学部研究科 哲学・思想専攻）